

## 備前市周辺への研修旅行

昨年度の反省から、暑さ寒さが気にならず・紅葉が期待できる行楽シーズンの11月5日(水)、顕彰会会員をはじめとする25名で、特別史跡「旧閑谷学校」をメインとした備前方面への研修に出かけた。

駐車場からウキウキ気分で軽やかに歩を進め、閑谷学校の**校門**(鶴鳴門)をくぐると、講堂を中心に静かで落ち着いた雰囲気に取り込まれるようだった。

3グループに分かれ、備前市ボランティアガイドの案内で、分かりやすく詳しい説明と参加者からの質問への回答を得ながら、**石堀**(学校の周囲に隙間なく積まれたかまぼこ型の堀。高さ2m・幅1.8m・全長765mに及ぶ)・**閑谷神社**(創始者池田光政を祀る神社)・**聖廟**(儒教の祖孔子の徳を称える施設)・**講堂**(学問の殿堂で閑谷学校を代表する国宝)・**小斎**(藩主が臨学の際に使用する御成の間)・**習芸斎**(農民たちも学んだ教室)・**飲室**(湯茶を喫した休憩室)などを見学した。

**楷の木**の紅葉を期待していたが、猛暑の関係で少し時期が遅れているようだ。講堂では、岡山市内の中学生が論語の授業中で、唱和の音が響き渡り、当時の様子が思い起こされるようだった。授業後は箒で履き、後ろ向きで雑巾がけをし、朱塗りの広間は火灯窓から差し込む光を反射していた。

1905年(明治38年)の姿が残る校舎を利用した**資料館**には、西山拙斎や姫井桃源などの文人と交流をもち、一緒に閑谷学校を訪れた菅茶山などの紹介があり、少し離れた場所には、茶山や頼山陽などを迎えて親交を結んだ**黄葉亭**(茶室)もあった。もっと時間を費やして見たかった。

昼には、たっぷりの海鮮料理を頂き、びぜん海の駅での水産物を中心とした買い物を済ませて備前焼の窯元へ……。三段登り窯の前で、備前焼が完成するまでの作業の説明とともに、材料の土や燃料としての赤松の不足と合わせて、よりよい物を時間をかけて創造する伝統工芸への不理解からくる後継者不足を熱弁された。そうして視点をもって、じっくりと作品を鑑賞した。

そして帰路へ。少し歩く距離は長かったが、豊かな学びを得ての心地よい疲れだった。

### 《俳句の会の方々から寄稿された作品例》

講堂に響く素読や楷紅葉  
焼きしめし備前瓦や秋の蝶

聖廟の朱混の瓦秋澄めり  
窯出しの火襷著き冬帽子



閑谷学校



備前焼の窯